2018 年度テイヤール・ド・シャルダン懸賞論文
私の研究が私自身に問いかけているものは何か

論文課題「私の研究が私自身に問いかけているものは何か」

～人間の社会化論からの検討～

B1881867　福谷友利江(ふくたにゆりえ)
博士前期課程総合人間科学研究科　教育学専攻 1 年

要旨

本論文は、テイヤール・ド・シャルダンの著作のうち、主に『現象としての人間』や『自然における人間の位置』で論じられ、他論文でも通底する考え方となっている「人間の進化」についての論を基礎としている。現代社会はグローバル化によってさまざまな問題が発生している。この問題一つ一つを、不安を招く原因であり、不安解消のために解消すべき事柄としてではなく、人間の進化の過程として捉えなおすことで、私の研究テーマである社会的排除という社会問題についても、新たな捉え方が可能になることを明らかにしようとした。進化の到達点としては、社会共通の善を重視することが、ミクロな視点においてもマクロな視点においても目指されるべきだと結論付けた。さらにその過程で、自らの研究が自分自身に問いかけている問いが浮き彫りになり、現時点での解答を示した。

具体的な構成としては、まず第 1 章で自身の研究テーマについての概要を述べた。次に第 2 章ではテイヤールの人間の社会化論についての検討を行った。1 節で現代社会の状況分析をし、2 節でその状況を「進化の過程」とみなす視点から捉え直すことで、グローバル社会の至るべきゴールを展望しようと試みた。さらに第 3 章では、そのゴールにおいて、現在の社会問題の一つであり、自身の研究テーマである社会的排除はどのように解決されているべきかを模索した。1 節ではまず「社会的排除を起こさないように人々を扱うことは、本当にできるのか」という問いを設定し、それを踏まえて 2 節で「本当に正しい扱われ方とはなんなのか」という問いに対する、自身の立ち位置を論じた。最後に第 4 章で、それまでの議論の中で浮かび上がってきた、本論文のテーマでもある、「私の研究が私自身に問いかけているものは何か」を明確化し、結論とした。

1. 私の研究についての概要

私の研究テーマは、「不適応行動のある子どもに対して、社会的排除を起こさないような社会の対応(包摂)方法を探る」ことである。不適応行動とは非行・不登校・引きこもり・ニートなど、社会に対して「適応的でない」様々な行動を指すが、この中でも少年非行に焦点を当てて論じている。なぜなら、非行少年への対応に、様々な不適応への応用可能性が感じられる実践が最も多いからである。

近年、少年非行の件数は各国で明らかに減少している。中でも日本の非行件数は減少傾向にあり、中でも凶悪犯罪件数は大きく減少している。さらに、日本においては、少年院をはじめとする矯正教育施設への入院歴のある非行少年の再犯率は、先進諸国と比較して明らかに低い。これは、日本の現在の非行少年への対応が成功していると言っていい結果である。しかし、メディアでは、少年事件が発生するたびにその凶悪化が声高に語られ、非行を行った少年に対して厳罰化を求める声も少なくない。また、非行少年に対する研究の方向性は、「なぜ彼/彼女は非行をおかしたのか」というケーススタディ的な原因論が多く、そのケーススタディから知識の飽和点を見出し、非行を予防しようとする試みは多く行われている。たしかにこの方向性の研究は非行予防に成果をあげているものの、そのような研究は「非行」の枠組みに職業的なかかわりを持つ人々(矯正教育施設職員や更生支援員など)の中で有効なだけで、大多数の「まっとう」とされる社会の人々には届かないものである。「非行」に関わる人々の社会と、大多数の「まっとうな」社会は隔絶されており、情報の交流もあまりないために、意識に齟齬が生じてしまっている。この状況を改善していくことが、私の研究目的の一つである。

近代化が進み、昔の地域的な共同体が失われていくにつれ、人々はそれぞれの個人の個性によってではなく、学歴や出身地など、世間のイメージによるぼんやりとした枠組みで捉えられるようになってきた。そのような中で、非行少年のような「確かな情報がない存在で、かつぼんやりとしたマイナスの先入観・イメージがある存在」に対しては、排他的な視線が向けられるようになるのも無理はないことだろう。非行歴・入院歴を持つ少年たちは、就職や結婚という、人生において重要なポイントで、強い社会的排除を受けているという現状がある。このような現状をふまえ、非行歴・入院歴のある少年が差別的な社会的排除を受けないために、彼らを「迎える」立場の多数の「ふつう」の人々やその社会が、どのように彼らと関わっていくべきかを考察したいと思っている。

なお、「非行」という行為については、犯した本人に責任があるという事実は認めている。このため、非行少年を被害者として論じたりはしない。やってしまったことに対しては、その相手に適切な贖罪をすべきだ。私が注目したいのは、「イメージや先入観による不適切な差別が生じてしまっている」点であることを注記しておく。

さらに本研究は、前述のとおり非行少年のケースだけに終わるものではない。様々な不適応を起こして「ふつう」とされる社会から社会的に排除されるリスクをもつ人々に応用できるような「包摂」の方法を、非行のケースから引き出していくことが最終目的である。

2.「人間の進化」論についての検討

私が読んだテイヤールの著作のうち、最も影響を受けたと感じたのは、彼の多くの論の根底にある、「進化」に対する考え方であった。著作としては『自然における人間の位置』に最も良くその考え方が表されている。教育学のなかでも、私は教育社会学を主な研究領域としているが、この領域では様々な社会問題を扱うものである。社会問題は当然、現在の社会関係との関連が深いため、現代社会の在り方をどう定義づけるかは、極めて重視されねばならない要素である。テイヤールは、人間の社会化の流れを、人間の進化の過程とみなした。つまり、今我々が直面しているグローバル化という流れは、進化の過程であるとみなすことができるのだ。この考え方は、社会問題の捉え方そのものの変化という、重大な新視点を私にもたらすことになった。

本章では、まずテイヤールの「人間の社会化(進化)[1]」についての言説に焦点を当てて、私なりの現代社会の現状分析と比較し、現在の人間社会の立ち位置を定めていく。次に、その立ち位置を踏まえ、これからの社会が向かっていく先について考察する。

2－1　現状との比較分析

著作『自然における人間の位置』第 5 章において、「地球化による非人間化」としてテイヤールが指摘している全体化の流れ[2]は、グローバル化が進む現在、さらに進展しているように見える。「地球市民(コスモポリタン)」ということばが使われるようになり、国家や宗教を超えた地球という概念に、市民としての帰属が求められるようになっているのだ。そして、「自由エネルギーによる模索」の試みは、自然科学の分野だけではなく、形而上学の分野において、より広汎かつ精密に、そして「精神的に」行われるようになってきたように考えられる。

しかし、「圧縮的な社会化」は、社会の現状を見る限りでは、個人的自由に対して大きな脅威をもたらし続けているように見える。特に現在前面に出てきているのは、かれが指摘する「全体化への個人の喪失」という恐怖のうち、社会構造の面で生じるゆがみによる恐怖だと考えられる。現在の社会は、市場主義社会と呼ばれることもあるが、主に経済的な側面を重視する考え方によって機能している。世界単位では、各国家は国単位での経済的競争力を上げることによって、国際世界での発言力を上げようと競争している。このために、国家単位では、効率化によってムダを削減し、国内生産力を上げるための競争が激化する。目前の効率化と利益を追求しすぎて、中長期的な視点が弱まってしまっている。個人単位では、社会に出たときの「成功可能性」を高めるために教育投資が大きくなっている。その投資ができない貧困層には階級の再生産が起きるが、その社会的地位の流動性はどんどん低下しており、再生産は起きやすくなっているだけでなく、「成功者」層と「失敗

---

[1]テイヤール・ド・シャルダン著『自然における人間の位置』93 頁

[2] 同 109－137 頁

者」層の様々な種類の格差が広がってきている。経済格差、意欲格差、社会参加と社会関係資本格差、知識格差など多岐にわたるものである。

さらに、人間は、テイヤールの言う、進化のあり方の一つとしての個体化とは違う意味で「個人化」されつつある。この状況は、「個人の喪失への恐怖」から生じた反動だとも考えることができる。先に述べた格差の問題において、自由競争という主義は大きな問題点を持っている。実際にそれ以外の不平等の原因が多数指摘されているにもかかわらず、最低限の義務教育を保障することで、国家は国民に「成功する」ためのチャンスを平等に与えているとされている。このため、もし「失敗」した場合、その原因は個人の能力値に帰結される。平等にチャンスが与えられたのに、そのチャンスを活かせなかったのは個人の責任であると結論づけてしまうのだ。「成功する」保証はなく、「失敗」のリスクは大きい。このような現状を人々は不安定だと感じ、さらなる確実性と安定を求めてどこまでも終わりのない闘いを強いられることになる。

このような現状においては、社会にはかれの指摘するとおり、先行きのしれない閉塞感が感じられる。社会問題の解決は、無限に不安定で不定型な社会における、とりあえずの現状の安定をより強く求めるような意味合いも感じられる。しかし、テイヤールの、人間の社会化が進化の途上形態であるとする論をとれば、明確な目標への可能性がひらかれる[3]。現状に疑問を呈し、探究し、改善しようとする試みがそのまま「進化」の過程の一環なら、社会問題の山積している現在はちょうどその過渡期であり、ターニングポイントでもあるのかもしれない。これらの問題を解決した先に、人間社会の完成形としての「グローバル化した社会」が存在すると考えられる。とすれば、我々に求められているのは、テイヤールの言うとおり、現状に絶望することなく模索と探究を進めていくことのみである。将来にあるはずの明るい結末を追うための模索という意識は、研究のために不可欠な要素となるように感じられる。次章では、「進化」という視点でこのような現代社会を捉え直し、進化した先の「グローバル」な地球という社会のあり方について考察する。

2－2　これからの社会が向かっていく先

前節で、現在人類は、「地球市民という全体化への圧力を受けている」と論じた。これをもう少し分析的に言うと、我々は現在、グローバル化という世界的な流れの中にあるが、その流れとは、市場主義的かつ個人主義的要素が強いものである。そして、そのような流れの中に国民国家が存在しているのだが、この国家間の関係性は、自律と不干渉を前提とした、自由競争状態にある、というふうに解釈できる。この状況の改善方法として、「進化の過程」としてのグローバル化を捉え直してみることは有効だと考えられる。

さらにこの捉え直しの過程で重要なのは、テイヤールが、現象がどれほど変則的な外観を持っていたとしても、そこには「絶対的な規則」や「普遍的な理論」が根本的特質とし

---

[3] テイヤール・ド・シャルダン著『自然における人間の位置』127 頁

て存在していると考えているように思われることである。これはすなわち、人間社会の倫理という点に即して言い換えると、社会における「正義」または「善」が存在するということになる。これらを踏まえて、「グローバル化」という動きを捉え直していきたい。

現在、世界に生きる人間は、国家や宗教、学校や企業、地域や家族といった様々なコミュニティに所属することで、社会的に生活を営んでいる。これらのコミュニティは、グローバル化という全体化の動きによってどう変化するのだろうか。

現在を進化の過程として捉えれば、「圧縮的な社会化」もしくは社会の「全体化」の動きとしての地球市民化の要求は、将来的に個人の喪失に繋がる性質のものではない。ということは、現在の国民国家を始めとする様々な社会的コミュニティもまた、グローバル化によって縮小したり統合されたりして失われるわけではないと言える。つまり、グローバル化という全体化の動きは、現在のコミュニティを含みこんだまま発展し完成するはずだ。

オルセン(2002)によると、グローバル化により形成される新しい世界では、コミュニティの境界線はこれまでのように習慣や伝統、民主主義の境界線ではなくなり、「コミュニティは境界を持たない」という。そして、「境界なきコミュニティは、一定の共有された目的と価値を基礎とする、国家横断的な民主主義を可能にする橋頭堡を築く余地を与える」と論じる。[4]現存するあらゆるコミュニティにおいて、何らかの共通利害をもつコミュニティがあるだろう。この「共通利害」を広い視点から見て、「人類にとって共通の善」があると仮定すれば、すべてのコミュニティは、その独自の価値を維持したまま、大きな善のもとに含みこまれることができる。つまり、我々の社会が、グローバル化という動きの到達点としてたどり着くべき姿は、人類にとって共通の「善」のもとに、すべての世界人類がまとまる世界であると言えるのではないだろうか。

3. 私個人の研究との関連

今までの章では、マクロな視点から、テイヤールの論を踏まえて社会の現状の考察を行ってきたが、本章ではそれをふまえ、私個人の研究領域というミクロな視点での考察を行っていく。

今までの私の研究には、「現代社会に生きる人々の、不安定への恐怖を取り除き、安定した社会参加を提供する」という目標のために、社会問題の一つである社会的排除をなくそう。そのための方法を検討しよう。という理論の流れがあった。しかし、前章のような社会の捉え方をすると、理論の流れは変化し、「進化した将来においては、人々が社会的にどう扱われるべきか」という到達点をまず想像し、「なぜ現在社会ではその扱い方ができていないのか」「どうすればあるべき姿に近づけるのか」について模索していく、というものになる。このとき、はじめの「どう扱われるべきか」という問いに答えるために、「社会的排

---

[4] Olssen,M “Michel Foucault as ‘Thin’ Communitarian: Difference, Community, Democracy” Cultural Studies-Critical Methodologies,2/4,483-513

除を起こさないように人々を扱うことは、本当にできるのか」という問いが生じた。1 節ではこれについて検討する。

3－1　社会的排除を起こさないように人々を扱うことは、本当にできるのか

前章でもふれたように、テイヤールは、現象がどれほど変則的な外観を持っていたとしても、そこには「絶対的な規則」や「普遍的な理論」が根本的特質として存在していると考えている。この考えは、かれのどの論にも通底しているように見えるが、これには絶対的な存在である「神」を信じるキリスト教的な世界観が大きな影響を与えていると思われる。この意識は、前章の国民国家同士の関連についての世界論では正しく応用できるように感じられた。しかし、自分の研究という視点で見なおしたときには強烈な違和感を抱いたのである。そこでこの違和感の原因を追求すると、形而上学において、中でも特に質的調査を要求する哲学的・道徳的・社会学的な問題においては、絶対的かつ普遍的に正しい理論が存在することが、果たしてあり得るのだろうかという疑問が生じていることがわかった。

社会的排除の研究が隆盛したのは、シカゴ学派の社会学研究においてである。ここでは共通する絶対的な正解や価値は存在しないという前提がある。しかし、人々は様々なコミュニティを営んでいて、コミュニティの価値観や考え方は共有しうるという現状がある。この状態において、コミュニティを結びつけているものは何なのかを分析しようとする。さらに、社会的排除の研究は、シカゴ学派の中でもシンボリック相互作用論的な考え方を受けつぐものが多い。ミード(1973)によると、「個人と社会は存在論的に独立し得ない[5]」。自己は社会的構築物であり、すべての社会的現象は人間によって交渉され、価値を与えられることによって価値を持つのである。ここからさらに踏み込んで、自己と社会の相互的な作用だけでなく、自己が一方的に社会から押しつけられる、社会的な関係性における権力や支配の影響についても考える。立場や考え方、自己を規定する社会・文化的背景が完全に同じである人間などいない。ということは、「ものの見え方が同じ」である人間は一人としていないということになってしまうのだ。すると、正しい規則や法則どころか、「社会的現実」すら、そもそも普遍的に存在していないという結論にたどり着いてしまう。つまり、どんな扱いをしても、社会的に排除されていると感じる人が発生しない社会の存在は難しいという結論になってしまうのだ。

しかし、テイヤールの述べるとおり、人間の社会化過程が生物としての進化の道筋の中にあるならば、二つの結論が導ける。すなわち普遍的な規則は必ず存在し、その中に「社会的排除が起きない」ような法則を持った扱いが存在するという結論と、社会的排除が行われているという現状そのものが、たとえば自然淘汰のような、「自然として正しい法則」であるという結論である。私の研究は、前者の場合は、そのような規則を見つけるべくな

---

[5] プシュカラ・プラサド著・箕浦康子監訳『質的研究のための理論入門』17－18 頁

される研究である。しかし後者の場合は、自然の法則に抗うための研究となってしまう。

3－2　本当に正しい扱われ方とはなんなのか

このようななかで、本当に正しいことは何なのだろうか。この問いは、具体的には以下のような疑問を内包している。それは、そもそも人々が社会の中で「排除されていない」と感じられる扱いがなされた時、果たしてそれは、客観的に普遍的原理に基づいた絶対的に正しい扱いが実現されている時なのだろうか。それとも、客観的に見れば正しくなくて、真理ではない原則に基づいているにもかかわらず、人々が全員「排除されていない」と主観するような扱いがなされたときだろうか。という問いである。前者は平等(equality)、後者は公平(equity)と言い換えてもいいかもしれない。まず前者の、「客観的に見て明らかに正しい扱い」という真理が確実に存在すると仮定する。しかし、前節で述べたような理由から、その原理に基づいて人々を扱っても、「排除されていない」と全員が感じるのは困難である。この論を採用した場合の社会の到達点は、不公平であるが平等であり、排除される可能性もあるがそれは仕方のない社会、ということになる。このような社会を形成することは、それがたとえ「正義の」ゴールでも、果たして「善い」ゴールと言えるのだろうか。私はそうは思わない。不平等ではあっても公平な社会こそが、目標として掲げたい社会のあり方だ。となれば、私にとっての「正しい」扱われ方がされる社会とは、平等ではないかもしれないが公正を重んじる社会であり、それが進化の到達点として目指すべきあり方だと位置づけることができる。

ロールズは善と正義の関係について「善に対する正の優越」を主張した。何を善となすかは各人の自由であるが、人々の集合体である「社会」においては、その運営をするための正しさである「正義」が必要だという。しかし、私の設定した到達点は、「善」の「正義」に対する優越であった。

本論文では字数の制約によりここから先は論じきれないが、テイヤールの著作により、このような新たな意味・方向付けで社会的排除という問題を論じることが可能になったのである。個人的な想像としては、ミクロな視点でもマクロな視点でも、個人の正しさである「善」が社会の正しさである「正義」を包括できるような社会こそ、地球社会の進化のゴールとしてふさわしく感じられる。

４．私の研究が私自身に問いかけているものは何か

以上のように、テイヤールの論を踏まえた「進化」という新たな視点から自分自身の研究を捉えなおしてきた。その過程で浮き彫りとなったのは、「正しさ」というものの複雑さである。「善い」ものと「正義」とは、必ずしもすべてがイコールではない。このとき、自分は「善い」ことと「正義」のどちらを目指しているのかを考え直す必要が出てくる。そしてその上で、社会において、個人において、コミュニティにおいて、目指すべき正しさとは何かについて問い続けていかねばならない。「善い」ことを到達点とすべきか、「正義」

を到達点とすべきか。私の研究が私自身に問いかけているものとは、「善さ」と「正義」のどちらを正しいとすべきかという哲学的な問いであり、到達点のあり方が全く異なるこの二つの「正しさ」のどちらを軸にして解決策を研究していくべきかという、自分の立場を明確にする必要性だったのである。

５．参考文献

・ Olssen,M “Michel Foucault as ‘Thin’ Communitarian: Difference, Community, Democracy” Cultural Studies-Critical Methodologies　2002
・テイヤール・ド・シャルダン著、日高敏隆・高橋三義訳『自然における人間の位置』みすず書房　1972 年
・テイヤール・ド・シャルダン著、美田稔訳『現象としての人間』みすず書房　1974 年
・プシュカラ・プラサド著、箕浦康子監訳『質的研究のための理論入門』　ナカニシヤ出版　2018 年
・G.H.ミード著、稲葉三千男訳『精神・自我・社会』青木書店　1973 年
・山崎庸一郎著『テイヤール・ド・シャルダン、未来への問いかけ』講談社現代新書　1971 年
・ジョン・ロールズ著、川本隆史・福間聡・神島裕子訳『正義論』紀伊國屋書店　2010 年